

日本語指導が必要な中学生に対するピア・ライティングの実践とその効果

細矢 衡（京都教育大学大学院生）

1. 研究の目的

本研究の目的は作文能力が低く、苦手意識を持っている日本語指導が必要な中学生に対して、作文の「構想、構成、作文」の各段階にピアとの交流活動を設ける、ピア・ライティングの実践を行い、その効果を検証することにある。また、実践を通して得られたピア・ライティングの効果や課題を基に、より効果的な実践モデルを本研究のまとめとして再考した。

2. 研究方法

2.1 研究の手順

①プレ作文のデータ収集、②ピア・ライティングを活用した実践、③収集した作文や学習者の活動内容の分析という手順で行った。なお分析は、①プレ作文と実践後の作文比較、②各ピア活動内でのフィードバックや抽出した変化を基に分析を行っている。

2.2 実践の概要

実践は公立の中学校2校で行ったが、実践の概要は2度目の実践である実践Ⅱを例に紹介する。

実践場所：公立Y中学校

実践日時：2018年10月15日(月)と10月16日(火)

実践対象：中学校2年生16名

作文題目：「外国から見た日本人のイメージについて」

2.3 実践の手順

(図1 実践Ⅱの実践手順)

	構想Ⅰ	構想Ⅱ	構成	作文
個人	構想①	構想③	構成①	作文①
ピア	交流タイム	交流タイム	交流タイム	交流タイム
個人	構想②	構想④	構成②	作文②

<各ピア活動の内容>

構想Ⅰ：構想①で挙げた作文のキーワードの根拠をピアに説明する活動

構想Ⅱ：構想③で考えた作文のまとめについての意見交流

構成：意見が伝わる文章構成か、「序論・本論・結論」の内容が適切か等の確認

作文：作文を読んで気づいたことの交流

なお、ピア活動後は交流を受けて、再度自分の考えを整理する活動を設定している。活動は筆者がワークシート使用し、生徒の進度を見ながら進行していった。活動の順番は、構想Ⅰ、構想Ⅱ、構成、作文の順番で進めた。

3. 結果と考察

3.1 実践結果と考察

実践Ⅰ・Ⅱ共に、プレ作文と実践後を比較したところ、構成の整理、主張の明確化、内容の具体化など、実践の前後で多くの面での改善の様子が見られた。

ピア活動の有効性に関しては、分析の結果「構想活動：内容の具体化・整理、表現の具体化・訂正」、「構成活動：内容の具体化・整理」、「作文活動：表現面での推敲、表記・内容の推敲」が各段階で特に示される結果となった。

3.2 実践モデル再考のポイント

実践の結果、学習者間では特に「表記、表現、内容」に関する推敲活動が行われることがわかった。しかし、活動段階や学習者によってその着眼するポイントにはばらつきがあるため、具体的な活動として、上記の三つをチェックする以下のようなチェックポイントを設定した。

表記チェック：漢字のミス、句読点やカギ括弧などの表記ミスの確認

表現チェック：間違っていたり、不自然な言葉遣いをしていないかの確認

内容チェック：読んでいて意味が伝わる内容となっているかの確認

ピア活動の中でこのチェックポイントを基にピアと交流することを通して、より多くの意見交流が可能になると思われる。

また、構成段階では構成に関する話し合いではなく、構想の延長のような作文の内容に関する話し合いが見られたことより、学習者自身が構成について考える活動を構成段階に設定し、構想活動との区別をはかった。

4. 研究の意義と課題

本研究の意義は、ピア・ライティングが中学生段階の学習者に与える効果を明らかにし、その効果や実践の課題を基に、より効果的な実践モデルを示せたことにある。

また、ピア活動を取り入れた研究は、広瀬(2004)等におけるピア・レスポンスの研究、牛窪(2010)によるピア・ライティングの研究等を参考にしたが、その実践対象は留学生や日本語学校の学生であり、学習者としても未熟な中学生を対象としたものは見られない。その意味でも、中学生段階の学習者へのピア・ライティングの実践とその効果を示すことは、今後の日本語指導が必要な中学生への作文指導を考える上で意義があると言える。

しかし、最終的に作成した実践モデルについては実践を行っておらず、その効果は推測の域を出ないものとなっており課題として残る。また、意見文作成における実践は行えたものの、それ以外の形式の作文においては同様の効果が得られるかの検証を行っておらず、ピア活動の内容設定を含め、検討すべき点は多い。今後、中学校現場においてピア・ライティングの手法を活用し、さらにその効果を探求していきたい。

【引用文献】

牛窪隆太(2010)「協働で書く試み ピア・ライティングとしての「リライト活動」の可能性をめぐって」『言語文化教育研究』9, pp1-16

広瀬和佳子(2004)「ピア・レスポンスは推敲作文にどう反映されるか—マレーシア人中級日本語学習者の場合」『第二言語としての日本語の習得研究』7, pp60-80